

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3372800221		
法人名	有限会社 本陣会		
事業所名	グループホーム 本陣 (東の丸)		
所在地	岡山県小田郡矢掛町矢掛2557		
自己評価作成日	令和 5 年 8 月 14 日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様が心地よく生活して頂くよう配慮すること。更に、地域の中の施設としての役割を果たしていきたい。災害時や感染症発生時にこれまでの経験が活かせるようにしたい。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2018_022_kani=true&JigyosyoCd=3372800221-00&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社アウルメディカルサービス
所在地	岡山市北区岩井2丁目2-18
訪問調査日	令和 5 年 8 月 24 日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

統括は毎日一人ひとりに声を掛けて、話を聞くことを大切にしている。職員は各ユニットの管理者に意見が言いやすく、統括も耳を傾けてくれる。職員が提案するレクリエーションもスムーズに実行することができ、利用者が工作、ボーリング、魚釣り、ちぎり絵、早口言葉、体操や歌を楽しんでいる様子が見られた。さらに職員の提案で、20年周年にあたり、夏祭りを開催することができ、ヨーヨー釣りやケアマネの得意分野であるマジックショーを楽しんだ。夏祭りに好評だったわたがし作りやかき氷作りが日常のおやつにも取り入れられた。昼夜の食事は、社長のこだわりで、プロの料理人による手作りのメニューを提供する日がある。織部焼や備前焼の食器を使用して、盛り付けにも工夫が見られ、目でも楽しむことができている。職員は、日々利用者の気持ちに寄り添えるように、ゆっくりと話をする時間を持ち、家庭的な落ち着いた環境作りを心掛けている。利用者に対してささいなことにも気づくことができ、困っていることにも耳を傾けて寄り添ったケアができていて、職員のやりがいにも繋がっている。利用者ファーストの精神で柔軟に対応してきたからこそ、節目である20年目を無事に迎え、更なる飛躍と発展に期待が持てた。

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月ケアミーティングで読み合わせをしている。また事務所や玄関、リビング、日誌へ内容を貼付し、常に意識している。	前回の評価を受けて、理念を玄関とリビングにも掲示した。事務所と日誌には現在も掲示している。月1回、ミーティングで確認することで職員に浸透している。新入職員に対しては、統括が丁寧に説明し教えている。理念にもある「優しく寄り添う」気持ちを忘れずに介護に従事している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で交流はないが、他事業所の運営推進会議への参加している。	近隣の散歩中に出会った方と挨拶を交わす関係ができています。地域の方からお花を頂くこともある。ケアマネが他の事業所の会議に出向いているので、情報が得やすい。敬老のイベントとして、子どもの神楽が来てくれたり、地域清掃がある場合には、社長から直接声を掛けて頂いたりしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居施設としての役割。認知症への対応方法への普及的立場。運営推進会議を通じてご家族や民生委員の方へ認知症対応型施設として取り組んでいることを情報発信している。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月ごとに会議を行い、利用者状況やサービス内容について報告を行い、それに対してご意見を頂き記録として残し、ミーティングの場を活用し全職員に周知するようにしている。	参加者は、民生委員、役場の介護福祉課課長、他施設の代表、家族代表、施設の社長、両管理者、ケアマネが参加している。利用者や職員の活動内容、助言や要望をまとめたものを報告している。山もみじ新聞は利用者の様子がわかるとのことで好評を頂いている。	地域との関わりをもっと深めてみてはいかがでしょうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	疑問に思うことはすぐに尋ねる様にしている。疑問に対しての返事は必ずあり。運営推進会議に町の担当者の方にご出席頂き、利用者のご様子やケア向上のために取り組んでいることを伝え、それに対してご意見やアドバイスを頂いている。	窓口はケアマネが担当だが、両管理者が窓口となる場合もある。民生委員の方とは、ボランティアの時から顔を知っているので、何でも話せる関係ができています。有料駐車場が避難場所になっているので、直近の運営推進会議で南京錠の鍵を預かれないか提案し、預かることができました。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。まず身体拘束はしないという意識を高めることが大切である。ミーティング開催時に身体拘束における研修を行っており、また身体拘束ゼロを目指す為の理念の読み合わせを行っている。	年2回内部研修を実施して、新入職員にも研修の場を設けている。クイズ形式にすることで、理解度が上がるようにしている。身体拘束にあたるかどうかの確認を役場の職員にも相談している。スピーチロックにならないように疑問形にして話すようにしている。午前中のみ玄関の施錠はしていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	言葉を含めての虐待はしないこと。毎月のミーティングで当施設の理念の読み合わせを行い意識統一している。また、虐待防止における知識の普及のための研修を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用されている方がおられます。どこまでの権利を有するのかということが大切である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	まず疑問になることの確認を行う。契約の改定等があった場合には必ずご家族に連絡し了解を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	管理者を中心に常に意識統一を図っている。運営推進会議にご家族の代表の方にご参加頂き、意見等を伺い運営の参考にしている。	何かあれば、直接電話連絡をすることで家族との連携が取れている。利用者の気持ちに寄り添えるように職員が話に耳を傾けている。嚥下が悪化したので、とろみをつけていいかの相談をした。昼の口腔ケアをして欲しいとの要望があり、実施したことで感染症予防にも繋がった。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者を通じて意見交換を行い、福利厚生を含め運営が円滑に進められるよう配慮。特に職員が一堂に集まるミーティングで意見や提案を受け、改善できるように努めている。	日常業務の中で、両管理者に意見が集約されて、ケアマネに情報が集まる。ケアマネの対応が早いので職員は助かっている。月1回のミーティングでは、出た意見の結果を報告する場合もあり、申し送りノートでも報告している。職員の提案で施設内で夏祭りを開催することができ、ケアマネの手品が大好評だった。職員の希望休や有休もしっかり取れている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	可能な限り配慮している 現在就業している職員の年数は10年以上の割合も多くいる。外部研修に参加することで手当が付くように優遇措置を設けた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々の能力をアップしていくことが大切ではあるが、事業所でできることは時間的・経済的支援の両方であると考えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣の小規模多機能ホームへの運営推進会議への参加にて情報収集を行う。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居されたら優しく寄り添いまず信頼関係をつくること。常にすべての事柄について声掛けを行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の要望に沿っての支援 例えば、頻回に面会希望なのか、少し距離をおきたいのか、..など		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今必要なサービスが当施設ではない場合もその他の選択肢を提供できること。具体的には、状態等を確認した上でデイサービスやショートステイなど必要なケアや経済的な事も含め情報提供に努める。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	同じ食事を頂き、共に寄り添い生活していること 24時間を通じて感じることで家族以上の思いになっている。ご家族より、自宅や病院にいる際に本人より「本陣へ帰りたいんです。」と話されることがあるとのこと。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	状況の説明は主観的にならず客観的に伝えること。そこからご本人にとって最善の解決策につながるものが臨ましい。時には面会や電話にて直接ご本人とお話頂くようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	原則面会・外出は自由としている。ただし、ご本人の状況を周囲がどのように理解しているのか。双方を把握して関係支援が必要であると考え。コロナが落ち着き、ご友人やご近所の方と面会する機会を持つことで孤立しないようにしている。	コロナの状況を見て、玄関や居室で短時間で面会を実施することができた。家族との外出や外食は可能としている。帰宅願望が強い方へは、決して無理強いすることなく家族と連携を取り、実家へ帰れるように工夫している。玄関先のソファやリビングの席が今ではすっかり馴染みの場所となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	リビングでの席の配置についてはかなり配慮している。食事やレクリエーションは共有の場所となる。ある程度の距離感を保つためには居室を有効活用できれば理想的である。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居理由がどうであれ、ご本人とご家族へ細かい説明を行うこと。納得して頂くことでその後の関係を断ち切らないことにつながる。ただ、暴言・暴力・強い介護抵抗への対応には限界があるが、説明してもそれをご家族はなかなか受け入れて頂けない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプランの立案はすべての生活におけるの基本となります。可能な限り情報収集をすることで本人の意向に近づけると思います。	入居時に初回面接シートにて、生活歴を把握している。別施設から移ってきた方は事前に情報を得ている。日々の生活の不安を取り除けるように、利用者の気持ちに寄り添うことを心掛けている。シャボン玉や紙飛行機を飛ばすことで童心に返ることができた。毎日の個人記録に様子を記入しているので、思いや意向が把握しやすい。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人との何気ない会話から情報を引き出し、またご家族にも面会や電話の際にお話を伺うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	食事・排泄・入浴を中心に記録を確実にとり、一日一日の情報を収集している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアミーティングを毎月1回行い、現状の報告と修正・立案へつなげている。新規の立案については、ケアマネジャーを中心としたアセスメントワークシートを活用、スタッフみんなで問題抽出している。また、ご家族と連絡を取りご意見等を伺っている。	入居時に暫定プランを立てて、何もなければ1年ごとに見直しをしている。ケアマネを中心にして、ケアミーティングにて、意見を出し合っている。全体像シートに職員が気づいたことをフリーで記入させることで、職員が手軽に書きやすく、プランの反映に繋がっている。また、協力医の意見も参考にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録への反映は出来ていると思うがスタッフが問題点と意識しての記録になっているか？という評価は難しい。特に重要な部分は赤字で記入するなどの工夫をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	身体機能や認知機能の急激な変化に伴い必要とされるケアを見極め、状況説明を行う。場合によっては病院や特養への転床。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域密着型であることが大きな意味を持つと思います。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	あゆみクリニックは協力医である。しかし、既往歴のある方は今までの主治医の継続をする方が望ましい場合がある。	入居時に、かかりつけ医は選べるが、ほとんど方が協力医に転医されている。社長の息子が経営している病院が提携医なので安心して任せることができている。他科へは、状況を鑑みて、職員や家族がそれぞれ対応している。歯科は必要に応じて、訪問して頂ける。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の生活の中で少しの変化にも気づき報告あり。施設で可能な処置は対応し、困難な場合は受診を行う。また、看護職からもアドバイス等を頂きケアの向上に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	協力医との連絡調整を取りながら必要医療機関への紹介を行っている。また、矢掛病院の地域連携室を定期的に訪問、情報交換を行っている。オープンクリニックによる受診で連携を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	これまでに2例の看取り行う。その際は訪問看護の支援もあった。現在看取りケアを支援してる。今後は協力医とスタッフの意見を取り入れながら対応して行きたい。ご家族の協力も必要になってくるため、意思の確認を行っている。	開設当初は看取りを実施していなかったが、数年前から看取りを行うようになった。終末期を迎えた際には、再度気持ちを聞くことで寄り添うことができています。看取りの際には、面会制限を設けずに対面で会うことができた。職員アンケートを実施することで、振り返りの場を設けるとともに職員の不安を取り除いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	常に情報交換することで問題解決へつなげている。恐怖心を煽るのではなく予測対策をすることで急変時の行動を見通すことが可能になると考える。日頃の様子を細かく知ることによって異変に気づきやすくなっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害は常にわが身におこること。という意識へ転換していくこと。今までの災害経験を活かせるよう生活している。年に2回以上の訓練を行いいざという時に備えている。また、施設環境や設備品の充実にも配慮していきたい。	訓練は年2回昼夜想定で行い、利用者も一緒に避難することができた。水害の場合は、駐車場、火災の場合は状況に応じて、病院やお寺、駐車場に避難するようにしている。いざという時のために、リビングの自席の背もたれに防災頭巾がついている。備蓄は玄関に、毛布や消耗品、水を1週間分保管している。自家発電も現在検討中である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しみやすさの中にでも尊厳をたもつこと。介護者としてのプライドを持ち続けてきたい。必ずご本人の意思を確認して利用者主体で動くようにしている。	呼称は苗字に「さん」づけで呼んでいるが、本人の希望する呼び方があれば、確認を取った上でその名称で呼ぶようにしている。プライバシーに配慮して衛生用品をイニシャルで記入している。プライバシーについても折々の研修で少し触れるようにしている。居室に入る際にも、事前に声を掛けて、ノックをしてから入室するようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	簡単な言葉での問いかけ。また、ゆっくりと大きな声で目を見ての語り掛けに配慮。細かい部分にまで目を向けてご本人の要望を拾うようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	全ての行動の前には必ず問いかけを行う。ご本人の意思を最優先に考えているからこそその対応である。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしい…。を優先するとほぼ毎日が同じ洋装になってしまう。しかし、バランスを取りながらアドバイス等援助することでその人らしい生活ができている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	テーブル拭きや片付けは一緒に行う。ただし、衛生面の配慮からすべての工程に利用者様が関わることは困難を極める。	週2回程度、プロの方が作る料理を堪能することができ、織部焼や備前焼の食器を使用しているので目でも楽しむことができている。残食はほぼゼロ。夏祭りのわたがしとかき氷が好評だったので、日常のおやつにも取り入れた。プロの方が作るおやつが好評で、あんこロールケーキやバナナケーキを食した。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量を毎日記録している。キザミやミキサー、トロミなど摂取状況の違いに応じての細かい支援を行っている。栄養状態と認知症、栄養状態と病気(心不全等)には深い関係がある。特に補助食品の必要性が高まっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後のうがいや歯磨きの支援。また、必要に応じて、歯間ブラシや薬用歯磨き粉などの選択も配慮。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを理解しての介助。また、個々に応じたのオシメやパット選択。更には、紙パンツから布パンツへ移行する能力アップへの見極めも行う。パット等は常にバージョンアップして品質が向上しているので、個々に合った物を選択している。	紙パンツで入居された方が、布パンツに改善された事例があり、職員の声掛けを大切にしている。家族の負担を減らす工夫として、パットのコストも念頭に置いている。排泄失敗時には、トイレというワードは使わずに、周りに気づかれないようにさりげなく誘導している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事での対応から薬剤への対応へと配慮。水分補給は食事以外で昼・14時・夕・18時半・夜トイレ時に介助。家族の理解が得られれば牛乳やヨーグルトなど個々での対応も行う。腹部のマッサージを行い、便秘解消に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	実際は曜日を決めているが、ご本人の状況や気分に合わせて介助。曜日や時間の変更については臨機応変に介助。体調に合わせて、浴槽に入れない方はシャワー浴や温浴シャワーを使用して入浴して頂いている。	入浴は週2回。シャワー浴の方は身体が温まるように長めの時間を設定していて、状況に応じて、サウナ温浴やシャワーの提供もしている。季節湯として、菖蒲湯やゆず湯で気分を味わっている。入浴を拒否される方へは、利用者の心に刺さる言葉を掛けることで、誘導しやすいように工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	能力や体力に応じての配慮。水分摂取や排泄介助など安心・安楽な対応を心がけている。不眠傾向の方は服薬での調節も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	現在は居宅管理指導を受けている。薬剤師の説明や残薬整理など、利用者様にもスタッフにも有益なものになっている。スタッフの薬剤への理解も深まっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中での活動や塗り絵・数字合わせ・四びしなどご本人の能力や好みの作業にトライしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節ごとのドライブへ。コロナ禍以降、なかなか外出できないでいるが、ご家族と外出して自宅へ戻ったり等徐々に制限を緩和している。	春先には、茶臼山へ出かけて満開の桜を観に行った。秋には美川の彼岸花の名所へ行った。近隣の矢掛の町が発展しているので、町の散策も楽しむことができている。散歩の風景を写真に撮って、家族に送ると喜んで頂けた。今後は、美術館前の大きな鯉に餌をやりに行く予定。棒体操や手作りカスターネットを叩くことで、外出した気分を味わえている。	外出支援に代わる、レクリエーションを考えてみてはいかがでしょうか。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人的には2千円程度の所持金は了解している。物取られ妄想にて混乱のある場合は事務所管理とする。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要に応じての対応 特に制約はない お荷物(お祝い事)へのお礼の返事は必ず行う。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	椅子やソファーなど設置 室内の照度は明るく感じる 季節感のあるちぎり絵や塗り絵などを壁に飾り、穏やかに過ごせるよう工夫。開所20年という年月をかけて施設内は心地良い空間になっている。	季節を感じられる数多くの作品が、リビングや玄関先の掲示板に飾られている。夏祭りに飾った、天井からの飾りつけも残り、余韻を楽しんでいる。利用者の塗り絵や、各行事の写真も貼られている。リビングでは新聞や雑誌を読んだり、TVからも情報を得たりしている。棒体操や手作りカスタネット演奏などのレクリエーションも行われ、利用者が楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングの席順など配慮している また、高機能の空気清浄機を設置している。コロナをはじめインフルエンザや風邪の予防に効果を発揮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドのみを設置している。それ以外は個人が使用していた物を持ち込んで頂く。今までの生活に近い状況で暮らして頂ける様支援。	ベッド、空気清浄機、エアコン、押し入れが備え付けられている。居室は広々とした木材を活かした造りとなっており、家具は利用者の希望や状態に応じて安全面に考慮して配置されている。仏壇に毎日、お菓子をお供え、手を合わせる利用者がある。テレビ、ラジオ、本を持ち込み、居室でくつろいでいる利用者もいた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下は広く取り、独歩・杖・シルバーカー・車いすなど様々な状況でも困難なく生活出来る様配慮 また、スタッフが利用者様の近くで見守り、必要時にさりげなく介助できる環境作りに心がける。		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)		1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいの			○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいの				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない			○	4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが			○	3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
		○	4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3372800221		
法人名	有限会社 本陣会		
事業所名	グループホーム 本陣 (西の丸)		
所在地	岡山県小田郡矢掛町矢掛2557		
自己評価作成日	令和 5 年 8 月 14 日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様の心地良い生活の場であることと地域の中での施設としての役割を果たしていきたい。また、災害時や感染症発生時の対応もこれまでの経験が活かせるようにしたい。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2018_022_kani=true&JigyosyoCd=3372800221-00&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社アウルメディカルサービス
所在地	岡山市北区岩井2丁目2-18
訪問調査日	令和 5 年 8 月 24 日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

統括は毎日一人ひとりに声を掛けて、話を聞くことを大切にしている。職員は各ユニットの管理者に意見が言いやすく、統括も耳を傾けてくれる。職員が提案するレクリエーションもスムーズに実行することができ、利用者が工作、ボーリング、魚釣り、ちぎり絵、早口言葉、体操や歌を楽しんでいる様子が見られた。さらに職員の提案で、20年周年にあたり、夏祭りを開催することができ、ヨーヨー釣りやケアマネの得意分野であるマジックショーを楽しんだ。夏祭りに好評だったわたがし作りやかき氷作りが日常のおやつにも取り入れられた。昼夜の食事は、社長のこだわりで、プロの料理人による手作りのメニューを提供する日がある。織部焼や備前焼の食器を使用して、盛り付けにも工夫が見られ、目でも楽しむことができている。職員は、日々利用者の気持ちに寄り添えるように、ゆっくりと話をする時間を持ち、家庭的な落ち着いた環境作りを心掛けている。利用者に対してささいなことにも気づくことができ、困っていることにも耳を傾けて寄り添ったケアができていて、職員のやりがいにも繋がっている。利用者ファーストの精神で柔軟に対応してきたからこそ、節目である20年目を無事に迎え、更なる飛躍と発展に期待が持てた。

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月ケアミーティングで読み合わせをしている。また事務所や玄関、リビング、日誌へ内容を貼付し、常に意識している。	前回の評価を受けて、理念を玄関とリビングにも掲示した。事務所と日誌には現在も掲示している。月1回、ミーティングで確認することで職員に浸透している。新入職員に対しては、統括が丁寧に説明し教えている。理念にもある「優しく寄り添う」気持ちを忘れずに介護に従事している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で交流はないが、他事業所の運営推進会議への参加している。	近隣の散歩中に出会った方と挨拶を交わす関係ができています。地域の方からお花を頂くこともある。ケアマネが他の事業所の会議に出向いているので、情報が得やすい。敬老のイベントとして、子どもの神楽が来てくれたり、地域清掃がある場合には、社長から直接声を掛けて頂いたりしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居施設としての役割。認知症への対応方法への普及的立場。山もみじという独自の新聞を毎月発行し、玄関へ掲示し施設内での様子などを外部へ発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回の会議内容を記録に残し、掲示し職員に周知している。会議への参加者が変わることも良いが、同一人物が参加されることでより深い内容の事柄について話し合いができる。	参加者は、民生委員、役場の介護福祉課課長、他施設の代表、家族代表、施設の社長、両管理者、ケアマネが参加している。利用者や職員の活動内容、助言や要望をまとめたものを報告している。山もみじ新聞は利用者の様子がわかるとのこと好評を頂いている。	地域との関わりをもっと深めてみてはいかがでしょうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	疑問に思うことはメールや電話ですぐに尋ねる様になっている。疑問に対しての返事は必ずあり。運営推進会議に町の担当者の方にご出席頂き、利用者のご様子やケア向上のために取り組んでいることを伝え、それに対してご意見やアドバイスを頂いている。	窓口はケアマネが担当だが、両管理者が窓口となる場合もある。民生委員の方とは、ボランティアの時から顔を知っているので、何でも話せる関係ができています。有料駐車場が避難場所になっているので、直近の運営推進会議で南京錠の鍵を預かれないか提案し、預かることができました。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。まず身体拘束はしないという意識を高めることが大切である。ミーティングで身体拘束廃止に向けての方針の読み合わせや机上研修を行うことでスタッフの意識を高めている。	年2回内部研修を実施して、新入職員にも研修の場を設けている。クイズ形式にすることで、理解度が上がるようにしている。身体拘束にあたるかどうかの確認を役場の職員にも相談している。スピーチロックにならないように疑問形にして話すようにしている。午前中のみ玄関の施錠はしていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	言葉を含めての虐待はしないこと。現在はコロナで面会は出来ないが、広く地域の方に施設へ入って頂く事で虐待防止への抑止になると考える。施設内研修や運営推進会議で議題に挙げ理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用されている方がおられます。どこまでの権利を有するのかということが大切である		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	まず疑問になることの確認を行う。また、事前に契約書に目を通して頂いてから説明するようにしている。。契約の改定等があった場合には必ずご家族に連絡し了解を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	管理者を中心に常に意識統一を図っている。運営推進会議にご家族の代表の方にご参加頂き、意見等を伺い運営の参考にしている。	何かあれば、直接電話連絡をすることで家族との連携が取れている。利用者の気持ちに寄り添えるように職員が話に耳を傾けている。嚥下が悪化したので、とろみをつけていいかの相談をした。昼の口腔ケアをして欲しいとの要望があり、実施したことで感染症予防にも繋がった。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者を通じて意見交換を行い、福利厚生を含め運営が円滑に進められるよう配慮。コロナ禍では職員からの要望を汲み取りサーキュレーターの設定や衛生品の充実への配慮を行った。	日常業務の中で、両管理者に意見が集約されて、ケアマネに情報が集まる。ケアマネの対応が早いので職員は助かっている。月1回のミーティングでは、出た意見の結果を報告する場合もあり、申し送りノートでも報告している。職員の提案で施設内で夏祭りを開催することができ、ケアマネの手品が大好評だった。職員の希望休や有休もしっかり取れている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	可能な限り配慮している 現在就業している職員の年数は10年以上の割合も多くいる。外部研修に参加することで手当が付くように優遇措置を設けた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々の能力をアップしていくことが大切ではあるが、事業所でできることは時間的・経済的支援の両方であると考え。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣の小規模多機能ホームへの運営推進会議への参加にて情報収集を行う。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居されたら優しく寄り添いまず信頼関係をつくること。常にすべての事柄について声掛けを行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の要望に沿っての支援 例えば、頻回に面会希望なのか、少し距離をおきたいのか、。など		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今必要なサービスが当施設ではない場合、その他の選択肢を提供できる。具体的には、状態等を確認した上でデイサービスやショートステイなど必要なケアや経済的な事も含め情報提供に努める。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	同じ食事を頂き、共に寄り添い生活していること 24時間を通じて感じることで家族以上の思いになっている。ご家族より、自宅や病院にいる際に本人より「本陣へ帰りたいんです。」と話されることがあるとのこと。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	状況の説明は主観的にならず客観的に伝えること。そこからご本人にとって最善の解決策につながるものが臨ましい。時には面会や電話にて直接ご本人とお話頂くようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	原則面会・外出は自由としている。ただし、ご本人の状況を周囲がどのように理解しているのか。双方を把握して関係支援が必要であると考え。コロナが落ち着き、ご友人やご近所の方と面会する機会を持つことで孤立しないようにしている。	コロナの状況を見て、玄関や居室で短時間で面会を実施することができた。家族との外出や外食は可能としている。帰宅願望が強い方へは、決して無理強いすることなく家族と連携を取り、実家へ帰れるように工夫している。玄関先のソファやリビングの席が今ではすっかり馴染みの場所となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	リビングでの席の配置についてはかなり配慮している。食事やレクリエーションは共有の場所となる。ある程度の距離感を保つためには居室を有効活用できれば理想的である。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居理由がどうであれ、ご本人とご家族へ細かい説明を行うこと。納得して頂くことでその後の関係を断ち切らないことにつながる。ただ、暴言・暴力・強い介護抵抗への対応には限界があるが、説明してもそれをご家族はなかなか受け入れて頂けない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプランの立案はすべての生活におけるの基本となります。可能な限り情報収集をすることで本人の意向に近づけると思います。	入居時に初回面接シートにて、生活歴を把握している。別施設から移ってきた方は事前に情報を得ている。日々の生活の不安を取り除けるように、利用者の気持ちに寄り添うことを心掛けている。シャボン玉や紙飛行機を飛ばすことで童心に返ることができた。毎日の個人記録の様子を記入しているので、思いや意向が把握しやすい。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人との何気ない会話から情報を引き出し、またご家族にも面会や電話の際にお話を伺うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	食事・排泄・入浴を中心に記録を確実にとり、一日一日の情報を収集している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアミーティングを毎月1回行い、現状の報告と修正・立案へつなげている。新規の立案については、ケアマネジャーを中心としたアセスメントワークシートを活用、スタッフみんなで問題抽出している。また、ご家族と連絡を取りご意見等を伺っている。	入居時に暫定プランを立てて、何もなければ1年ごとに見直しをしている。ケアマネを中心にして、ケアミーティングにて、意見を出し合っている。全体像シートに職員が気づいたことをフリーで記入させることで、職員が手軽に書きやすく、プランの反映に繋がっている。また、協力医の意見も参考にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録への反映は出来ていると思うがスタッフが問題点と意識しての記録になっているか？という評価は難しい。特に重要な部分は赤字で記入するなどの工夫をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	身体機能や認知機能の急激な変化に伴い必要とされるケアを見極め、状況説明を行う。場合によっては病院や特養への転床。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域密着型であることが大きな意味を持つと思います。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	あゆみクリニックは協力医である。しかし、既往歴のある方は今までの主治医の継続をする方が望ましい場合がある。	入居時に、かかりつけ医は選べるが、ほとんど方が協力医に転医されている。社長の息子が経営している病院が提携医なので安心して任せることができている。他科へは、状況を鑑みて、職員や家族がそれぞれ対応している。歯科は必要に応じて、訪問して頂ける。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の生活の中で少しの変化にも気づき報告あり。施設で可能な処置は対応し、困難な場合は受診を行う。日常生活の中で介護職員が一番に気づき、報告することが看護職員にとって最大の支援になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	協力医との連絡調整を取りながら必要医療機関への紹介を行っている。また、矢掛病院の地域連携室と定期的に訪問、情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	これまでに3例の看取りを行い、その内の1名は前回の外部評価にて報告。看取りを経験したスタッフもスキルアップしている。現在も看取りケアを支援している。今後も協力医とスタッフの意見を取り入れながら対応して行きたい。また、ご家族へもできるだけ顔を合わせる機会を増やして頂けるよう声掛けを行っている。	開設当初は看取りを実施していなかったが、数年前から看取りを行うようになった。終末期を迎えた際には、再度気持ちを聞くことで寄り添うことができています。看取りの際には、面会制限を設けずに対面で会うことができた。職員アンケートを実施することで、振り返りの場を設けるとともに職員の不安を取り除いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	常に情報交換することで問題解決へつなげている。恐怖心を煽るのではなく予測対策をすることで急変時の行動を見通すことが可能になると考える。日頃の様子を細かく知ることによって異変に気づきやすくなっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害は常にわが身におこること、という意識へ転換していくこと。今までの災害経験を活かせるよう生活している。年に2回以上の訓練を行いいざという時に備えている。また、施設環境や設備品の充実にも配慮していきたい。	訓練は年2回昼夜想定で行い、利用者も一緒に避難することができた。水害の場合は、駐車場、火災の場合は状況に応じて、病院やお寺、駐車場に避難するようにしている。いざという時のために、リビングの自席の背もたれに防災頭巾がついている。備蓄は玄関に、毛布や消耗品、水を1週間分保管している。自家発電も現在検討中である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しみやすさの中にもでも尊厳をたもつこと。介護者としてのプライドを持ち続けてきたい。必ずご本人の意思を確認して利用者主体で動くようにしている。	呼称は苗字に「さん」づけで呼んでいるが、本人の希望する呼び方があれば、確認を取った上でその名称で呼ぶようにしている。プライバシーに配慮して衛生用品をイニシャルで記入している。プライバシーについても折々の研修で少し触れるようにしている。居室に入る際にも、事前に声を掛けて、ノックをしてから入室するようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	簡単な言葉での問いかけ。また、ゆっくりと大きな声で目を見ての語り掛けに配慮。細かい部分にまで目を向けてご本人の要望を拾うようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	全ての行動の前には必ず問いかけを行う。ご本人の意思を最優先に考えているからこそその対応である。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしい…。を優先するとほぼ毎日が同じ洋装になってしまう。しかし、バランスを取りながらアドバイス等援助することでその人らしい生活ができている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	テーブル拭きや片付けは一緒に行う。ただし、衛生面の配慮からすべての工程に利用者様が関わることには困難を極める。	週2回程度、プロの方が作る料理を堪能することができ、織部焼や備前焼の食器を使用しているため目でも楽しむことができている。残食はほぼゼロ。夏祭りのわたがしとかき氷が好評だったので、日常のおやつにも取り入れた。プロの方が作るおやつが好評で、あんこロールケーキやバナナケーキを食した。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量を毎日記録している。キザミやミキサー、トロミなど摂取状況の違いに応じての細かい支援を行っている。栄養状態と認知症、栄養状態と病気(心不全等)には深い関係がある。特に補助食品の必要性が高まっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後のうがいや歯磨きの支援。また、必要に応じて、歯間ブラシや薬用歯磨き粉などの選択も配慮。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを理解しての介助。また、個々に応じたオシメやパット選択。更には、紙パンツから布パンツへ移行する能力アップの見極めも行う。パット等は常にバージョンアップして品質が向上しているので、個々に合った物を選択している。	紙パンツで入居された方が、布パンツに改善された事例があり、職員の声掛けを大切にしている。家族の負担を減らす工夫として、パットのコストも念頭に置いている。排泄失敗時には、トイレというワードは使わずに、周りに気づかれないようにさりげなく誘導している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事での対応から薬剤への対応へと配慮。水分補給は食事以外で昼・14時・夕・18時半・夜トイレ時に介助。家族の理解が得られれば牛乳やヨーグルトなど個々での対応も行う。腹部のマッサージを行い、便秘解消に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	実際は曜日を決めているが、ご本人の状況や気分に合わせて介助。曜日や時間の変更については臨機応変に介助。体調に合わせて、浴槽に入れない方はシャワー浴や温浴シャワーを使用して入浴して頂いている。	入浴は週2回。シャワー浴の方は身体が温まるように長めの時間を設定していて、状況に応じて、サウナ温浴やシャワーの提供もしている。季節湯として、菖蒲湯やゆず湯で気分を味わっている。入浴を拒否される方へは、利用者の心に刺さる言葉を掛けることで、誘導しやすいように工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	能力や体力に応じての配慮。水分摂取や排泄介助など安心・安楽な対応を心がけている。不眠傾向の方は服薬での調節も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	現在は居宅管理指導を受けている。薬剤師の説明や残薬整理など、利用者様にもスタッフにも有益なものになっている。スタッフの薬剤への理解も深まっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中での活動や塗り絵・数字合わせ・四びしなどご本人の能力や好みの作業にトライしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節ごとのドライブへ。コロナ禍以降、ドライブは出来ませんが、ご家族の方と一緒に自宅を含め外出している。徐々に以前の生活を取り戻せるよう制限の緩和を進めている。	春先には、茶臼山へ出かけて満開の桜を観に行った。秋には美川の彼岸花の名所へ行った。近隣の矢掛の町が発展しているのので、町の散策も楽しむことができている。散歩の風景を写真に撮って、家族に送ると喜んで頂けた。今後は、美術館前の大きな鯉に餌をやりに行く予定。棒体操や手作りカスターネットを叩くことで、外出した気分を味わえている。	外出支援に代わる、レクリエーションを考えてみてはいかがでしょうか。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人的には2千円程度の所持金は了解している。物取られ妄想にて混乱のある場合は事務所管理とする。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要に応じての対応 特に制約はない お荷物(お祝い事)へのお礼の返事は必ず行う。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	椅子やソファなど設置 室内の照度は明るく感じる 季節感のあるちぎり絵や塗り絵などを壁に飾り、穏やかに過ごせるよう工夫。開所20年という年月をかけて施設内は心地良い空間になっている。	季節を感じられる数多くの作品が、リビングや玄関先の掲示板に飾られている。夏祭りに飾った、天井からの飾りつけも残り、余韻を楽しんでいる。利用者の塗り絵や、各行事の写真も貼られている。リビングでは新聞や雑誌を読んだり、TVからも情報を得たりしている。棒体操や手作りカスタネット演奏などのレクリエーションも行われ、利用者が楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングの席順など配慮している また、高機能の空気清浄機を設置している。コロナをはじめインフルエンザや風邪の予防に効果を発揮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドのみを設置している。それ以外は個人が使用していた物を持ち込んで頂く。今までの生活に近い状況で暮らして頂ける様支援。	ベッド、空気清浄機、エアコン、押し入れが備え付けられている。居室は広々とした木材を活かした造りとなっており、家具は利用者の希望や状態に応じて安全面に考慮して配置されている。仏壇に毎日、お菓子をお供え、手を合わせる利用者がある。テレビ、ラジオ、本を持ち込み、居室でくつろいでいる利用者もいた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下は広く取り、独歩・杖・シルバーカー・車いすなど様々な状況でも困難なく生活出来る様配慮 また、スタッフが利用者様の近くで見守り、必要時にさりげなく介助できる環境作りに心がける。		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)		1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいの			○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいの				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある			○	3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが			○	3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)		1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが			○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
		○	4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが			○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				